

---

# 花便り

月姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花便り

### 【Nコード】

N5355F

### 【作者名】

月姫

### 【あらすじ】

花言葉から思いついた小噺集。1つの花に対して花言葉は幾つもあります。その中から1つを選んでいきます。同じ花が複数回出て来るのはご愛嬌という事でお願ひします。全21話。基本は平和、それに絡んで新蘭（コ蘭）が登場します。過去作なのでどこかご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、投稿にあたり「学園天国」「眼鏡」「リトル・プリンセス」の3つの設定で編集しています。設定内容については、それぞれのシリーズの第1話の前書きをご覧ください。

## 学園天国：梅・カーネーション（前書き）

「学園天国」では、高校生の彼らが主役です。  
時間軸はバラバラなので、コナンだったり新一だったり。  
基本は幼馴染です。

## 学園天国：梅・カーネーション

梅（厳しい美しさ）

武道場はしんと静まり返っていた。

年明けの練習試合、改方学園の広い武道場には両校の剣道部員たちや関係者が何十人と集まっているのに、皆呼吸すら忘れたかのようにじっと中央を見つめている。

中央に立つのは、甲乙つけがたい実力の持ち主と噂されている両校の大将。

改方の剣道部員たちの後ろからその背中を見遣って、和葉は自分を落ち着けるように小さく深呼吸をした。

試合前の息苦しいほどの厳しさと、試合中の痛いほどの激しさと、試合後の熱いほどの静けさ。

見慣れている背中なのに、和葉はいつもこの時だけは「格好いい」ではなく「頼もしい」でもなく「綺麗」だと思う。

甘く優しい美しさではなく、触れる事を許さない切りつけるような美しさ。

試合に臨む後姿を見つめている和葉の鼓動が、とくん、と跳ねる。肌を刺すような緊張感の中、自分の鼓動が周りの人たちにも聞えてしまいそうで、和葉は思わず両手で胸を抑えた。

\*\*\*\*\*

カーネーション（あらゆる試練に耐えた誠実）

「よかったね、蘭ちゃん。ホンマよかった」

携帯の向こう、涙声を必死に抑えながらずっと待ち続けた人の帰還を知らせてきた友人に、和葉は心からの祝福を返した。

「今まで心配させられた分、きっちり利子つけて返してもらなアカンよ？蹴りの2〜3発も入れたって、溜まったモン全部吐き出しから、思いっきり甘えたり」

あの優しい友人なら精々平手1つだろうななどと思いながら、和葉は明るく発破をかける。

このくらいの勢いで彼女を煽るのは、園子ではなくて自分の役目だろうと思うから。

携帯の向こうの友人が、くすつと笑ったのがわかった。

「じゃあ、アタシお邪魔やろうし、今は工藤君に蘭ちゃん譲ったげるわ。次からは電話の前にメールせなアカンなあ」

からかう和葉に慌てて否定の言葉を繰り返す友人と、軽い会話を交わして通話を切る。

ほうつと息をついて、和葉は手の中の携帯を見下ろした。

「ホンマ良かったな、蘭ちゃん……」

ずっとなんとなく、ただひたすらに彼の帰りを待ち続けていた友人を知

っているからこそその、心からの祝福。

「アタシには真似出来んよね、きっと」

これがもし平次だったなら、彼はきつと『待つな』と言って連絡を断つだろう。

そして自分だったなら、待っているからこそ帰れないのかもしれないと思うだろう。

それが東京の友人たちと自分たちとの性格の違いなのか、それとも関係の違いなのかはわからない。

勝手な想像にすぎないと言われるだろうけれど、和葉にはそう思えた。

## 学園天国：クロツカス・金魚草

### クロツカス（信頼）

かちゃん、と小さな音を立てて、遠山家の玄関が施錠される。

いつもの習慣で一通り家の中を確認していただろう彼女の2階にある自室の電気が点くのを確認して、漸く平次はほっとしたように肩の力を抜いた。

今まで大きな事件など起こった事のない静かな住宅地だが、それは昨日までの事であって今日もそうとは限らない。

哀しい事だが、それが今の時代だ。

ましてや、父親が不在がちな家に女子高生が1人で帰るならなおさら、標的になりやすい。

自ら公言していなくても、犯罪者はそういう嗅覚には優れているものの。

男ならば安全だとは言いきれないが、女の方がより危険なのは紛れもない事実なのだから。

それでも、深夜の帰宅や外出にあまり煩い事を言われないのは、彼女の父親が自分を信頼してくれているからだ。

待ち合わせに遅刻したり約束をドタキャンしたり、そんな行状を娘から聞いていても、こんな時に娘を適当に放り出すような男ではないと信頼して預けてくれている。

それがいつからか『親友の息子だから』ではなく『娘の幼馴染だから』でもなく、対等な一人の男としての信頼になっている事に平次も気付いている。

それはまだ高校生の肩には少々重いものかもしれないが、決して嫌

なものではない。

「最難関はおっちゃんやしな」

電気がついてすぐに入った『おやすみ』メールに改めて安堵して、いつものように『ハラ冷やすなや』と返して、平次は遠山家を後にした。

\*\*\*\*\*

金魚草（仮定）

『もし、幼馴染じゃなかったなら』

そんな仮定を試してみた。

お互い知らない場所で生まれ、知らない人たちに囲まれて育ち、高校生になって初めて出合ったとしたら、一体自分たちはどんな関係になったんだろう。

一目で恋に落ちるような、衝撃的なシーンが訪れるんだろうか。クラスメイトから友人へ、そして気になる異性へと、段階を踏んだ恋をするんだろうか。

恋心を抱いても、実らせる事が出来なかったりするんだろうか。それとも、卒業アルバムを開いて思い出すような、ただの友人で終わるんだろうか。

そもそも、この広い世界で出会えるのだろうか。

「何考え込んでるん？」

「いや、別に」

「別にで、2時間待たせた挙句に黙り込んでその言い草って何なん！？」

「ホンマにしょーもないコトや」

昨日少しばかりかわった事件の事で府警に寄ったら、思った以上に時間がかかった。

怒り心頭で怒鳴りつけてくるだろう和葉の様子を想像していたのに、待ち合わせの場所に彼女の姿は見えなかった。

その瞬間、ふと思ったのだ。

和葉はいつでも待っていてくれる。

それは、幼馴染の自分の事を、それこそ長所も短所もクセまでもみんな知っていて、理解してくれているからだ。

だからこそ、繰り返し返される遅刻やドタキャンを、怒りながらも最後には仕方ないと笑って流してくれる。

けれど、これがもし『幼馴染』ではなかったなら、この広い世界で出会えた事に感謝する間もなく繋がりは断たれてしまうだろう。

それがたとえ恋人だったとしても、いつでも自分の興味を引く事が最優先で他の事はたとえ大事な約束でも後回しにしてしまう男など、呆れて二度と待とうなどとは思わないだろうか。

すぐに現れた幼馴染は、待ち惚けをくらって冷えた身体を温めようと飲み物を買って行ったと、オレンジ色のキャップの小ぶりのペットボトルを掲げて見せた。

その後に続いた小言が何故か甘く聞えたのは、心の奥底にずっと燻

っている恋心のせいだろう。

「それよか、急がんと試写会始まるで？」

「アンタのせいやん！」

少々ご機嫌ナメな和葉を促して、試写会の会場へと足を向ける。

今ここにいるのは『幼馴染の和葉』で、仮定の話など無意味だ。

『幼馴染』という枷に足止めされているうちに熟した種は、彼女の心に他の花が芽吹く前に託さなければ永遠に開かない。

その種を託すための呪文は、もう喉元まで出掛かっていた。

## 学園天国：パンジー・椿

パンジー（物思い）

『どうしたの、和葉ちゃん？』

携帯の向こうから届いた蘭の心配そうな声に、和葉ははっとしたように顔を上げた。

「ゴメン、ちょおぼおつとしとって……」

『心配事？』

「うっん、そんな大層なモンやないんよ。ただ……」

少しだけ迷って、和葉は重たげに口を開いた。

「今日、学校で進路希望調査票貰ってな……」

『あたしも昨日もらったよ』

「そうなんや」

『来年は受験だもんね。和葉ちゃんは希望大学とかもう決めた？』

「うっん、まだだよ」

『成績の事もあるし、どこにしようか迷うよね。新一は多分、東都大で決まりだろうけど』

「平次も多分、そうやないかな？留学までは考えてないと思うんだけど、とことんやるタイプやから、トップの大学狙うと思うわ」

『服部君なら楽勝でしょ？』

「うん」

繰り返される進路希望調査や全国模試が、自分たちを否応なく大学

受験へと追い立てる。

来年の今頃は、入試の真っ只中だ。

『心配事って、もしかしてそれ？』

「……うん」

平次はきつと東都大を希望して、あっさりと合格するだろう。

そうなれば、少なくとも4年間は東京で暮らす事になる。

『幼馴染』なんて、離れてしまえばそれまでの脆い繋がりでしかない。

『大丈夫だよ、きつと。でも……』

「……でも、なに？」

『これはあたしの勝手な提案なんだけど、和葉ちゃん、ちょっとだけ勇氣出してみない？』

「勇氣？」

『そう、勇氣。今のままの気持ちを引き摺ってたら、きつと後悔すると思う。だから、思い切って心の中にあるもの全部、服部君にぶつけてみない？』

「せやけど……」

『勿論、和葉ちゃん次第だけど、そうしたら新しい選択肢も出来るんじゃないかな？』

「うん……」

蘭の言う事もわかるが、やはりそう簡単には覚悟を決められない。手元の進路希望調査票を手に、和葉は小さなため息を零した。

\*\*\*\*\*

椿（贅沢）

『贅沢モン』と言われる事がある。

それなりの地位を持った父親と美人と言われる母親がいて、それなりに裕福で、好きな事させてもらえて、他人に誇れるくらいには頭が良くて、かといってモヤシじゃなくて武道も結構イケて、オンナを選べるくらいの容姿も持っていて、おまけに可愛い幼馴染がいる。これ以上ないくらいに贅沢モンだと。

それなら、逆に訊きたい。

親の職業や環境は仕方ないにしても、その他の部分についてオレに愚痴れるだけの努力はしているのかと。

好きな事をするために、親を納得させるだけの努力はしたのか。

理解力や応用力には確かに差はあるだろうが、知らない事を知る努力はしたのか。

毎日の辛い稽古に耐えて、自分を鍛える努力はしたのか。

自分で出来る努力はしてきたつもりだ。

だから、今のオレになっている。

表に出てるのは、その結果にすぎない。

そして、努力が足りない部分はそのまま、一向に成長していない。それが何かと言うのは白状したくはないが。

## 学園天国：ラッパ水仙・スイートピー

ラッパ水仙（心づかい）

「かゝずは」

爽やかな朝には不似合いな地の底から響いてくるような声が、改方学園のとある教室に不気味に響いた。

友人たちとお喋りに興じていたクラスメイトたちは一斉に名前を呼ばれた人物に目をやり、彼女が平然としているのを認めるとまたお喋りに戻った。

ちよつとした好奇心から、様子見しながらではあるが。

「おはよう、平次」

「おはようやないわ！コレ何やねん！」

平次が、家を出た時から握り締めていた携帯を和葉に付きつける。和葉がわざとらしく目を逸らした。

「何って、平次の携帯やる？」

「この待ち受けは何なんやて言うとなんのや！」

平次の携帯で燦然と輝く、澄ました顔でカメラ目線をキメている工藤新一の写真。

「やって、アンタいつつも工藤工藤言うてるやん？パソコンの壁紙だと家で見られへんけど、携帯の待ち受けやったらいつでも愛しの工藤君に会えるしええかなと思って。アタシの優しい心遣い、

感謝してな」

背景におどろ線を背負いながらにつこりと笑う和葉に、彼女を怒らせただろうアレコレを思い出した平次が押し黙る。

「あ、心配せんでも、工藤君の携帯の待ち受けはちゃんと平次になつとるよ。蘭ちゃんに工藤君の写メ送ってもらったお返しに、平次の写メ送つといたから」

「勝手に人の携帯触んなや！」

「昨夜、ちゃんと言ったよ？平次の携帯に蘭ちゃんからのメール転送してしもたから消したいんやけどええ？つて。構わんけど他の消さんようにせえよ、充電切れそうやしついでに突っ込んでいてくれと言ったやん？」

「……………」

平次が再び押し黙る。

確かにそんな事を言った覚えはあるのだ。

そして鳴り響く着信音。

ディスプレイに表示された名前を確認すると、平次は大きく息を吸い込んでから通話ボタンを押した。

「くどーっ！オマエ、何やらかしよったっ！！」

『デメーこそ、何やりやがったっ！！』

いつぞやの再現フィルムを見るかのような光景と全く成長してなさそうな東西高校生探偵たちの様子に、クラスメイトたちは揃ってため息をついた。

\*\*\*\*\*

スィートピー（ほのかな喜び）

オバチャンに留守番を頼まれて、服部家の居間で最近ハマってるク  
ロswードに夢中になる事2時間。

何となく口寂しくなつて冷蔵庫を開けたら、アタシの専用コーナー  
に季節限定のイチゴのデザートが入っていた。

何で服部家の冷蔵庫に『和葉』なんて書かれたプラスチックの籠が  
入ってるのかとか、何で他人の家の冷蔵庫勝手に開けてるんだとか  
その辺の説明は『幼馴染だから』でご容赦願うとして、ここに入っ  
てるって事はアタシが自由に食べていいって事。

入ってるデザートは、昨日の学校帰りにコンビニで見かけたものば  
かり。

オバチャンはあんまりコンビニには行かないし、おやつを買ってき  
てくれた時にはいつも声をかけてくれる。

オジチャンはお土産を買ってきてくれても滅多に自分からは言っ  
てくれないけど、必ずオバチャンが教えてくれる。

留守番を頼まれた時、オバチャンは特に何も言わなかった。

ゆえに、買ってきたのは平次。

という事は、多分この間の遅刻の埋め合わせのつもりだろう。

普段はこんな事しないのに、さすがの平次も『遅刻』『ドタキャン』  
『遅刻』の連続技を繰り出した事を幾らか反省してるらしい。

「ムースとロールケーキとショートケーキ……。大負けに負けて、  
遅刻1回分やね」

一応文句はつけてみたけど、アタシの頬は緩んでる。

我ながらお手軽な性格だなと思いつつ、まずはショートケーキに手を伸ばした。

## 学園天国：フリージア・ストック

### フリージア（期待）

時計を見て、ため息を1つ。

鳴らない携帯を開いて、ため息をもう1つ。

待ち合わせの時間はとくに過ぎたのに、待ち人は現れない。

3つ目のため息について、読みかけの本に目を戻した。

今日の待ち合わせはファーストフードだから外にいるよりはラクだけど、それでもただ待っているのは辛い。

少しでも気を紛らわそうと持ってきた小説も、ただ文字を追っただけで内容なんて頭に入ってこない。

遅刻もドタキャンも珍しくないけど、慣れる事なんて出来ない。

耐えるオンナなんてアタシには似合わないけど、それでも待ってしまふのは多分惚れた弱み。

仕方ないよねと4つ目のため息をついた時、ポケットの中の携帯が鳴った。

\*\*\*\*\*

ストック（未来を見つめる）

幼い頃は、自分は何にでもなれるし、何でも手に入れられると思っ  
てた。

成長するにつれて、選ばなければいけない事や諦めなければならな  
い事を少しずつ覚えた。

それでもまだ小学生くらいまでは、自分の前には無限の可能性があ  
るし多くの物を持てると信じてた。

中学に上がる頃には、自分が手に入れられるものには限界があると  
気が付いた。

高校に入って、大学からその先へと自分が進みたい道を見つけなけ  
ればなくなってしまう、自分が持てるものの少なさに少しだけ失望し  
た。

そして始めて、本当に手に入れたいもの、絶対になくしたくないも  
のの存在を強く感じた。

傍にいた事が息をするより自然で、まるで自分の一部のように思っ  
ていたけれど、それは当然の事ではないと言う事も知った。

この先、自分が手に入れられるものなんて、そう多くはない。

いや、無理をしてまで余計に持ちたいとも思わない。

何を捨てても失いたくない唯一のものだけを手放さずにいられるな  
ら、それで充分だ。

## 学園天国：キンポウゲ・マンサク

キンポウゲ（楽しみ到来）

腕時計を見て、携帯を確認して、改札口に目を戻す。

さつきからずっと同じ事を繰り返してる幼馴染を横目に、オレも時計を確認した。

珍しく工藤——いや、今はまだコナンだったな——から、連休を利用してこっちに来ると連絡が来たのは、2週間前のこと。  
何でも、姉ちゃんが両親の縫りを戻させようと何か企んだとかで、ちよつと東京を離れていたらしい。

工藤はそのお供というワケだ。

理由はどうあれ、親友が久しぶりに遊びに来るからと、和葉はそれこそガイドブックを買いかねない勢いで楽しみにしていた。  
勿論、オレも楽しみだ。

「事件だけは起こらんといてな」

幼馴染の唇から零れた小さな呟きは、聞えないフリをしておいたが。

\*\*\*\*\*

マンサク（靈感）

「肝試ししようや」

冬にないとは言わないが、主に夏になると誰かが言い出す。

『面白い』と乗るヤツもいれば、『嫌だ』と拒否するヤツもいるし、『くだらない』と冷ややかに笑うヤツもいる。

反応は人それぞれだが、絶対に参加しないと力の限り拒否するヤツが、オレの傍に1人。

「アタシはパス！謹んで辞退申し上げます！」

毎年恒例の武道部合同の短期合宿でのお約束な展開に、普段なら乗ってこないだろう冷めた連中も苦笑しながら参加を表明しているというのに、彼女は頑なに拒否の姿勢を崩さない。

部活仲間や友人たちが手を変え品を変え説得してくるが、彼女の意思は変わらない。

いつもは付き合いのいい彼女にしては珍しい徹底した拒絶に、それ以上は無理強い出来ないと本部待機で双方が妥協した。

「服部の名前出してもアカンやなんて、どんだけ苦手なんや」

言い出しっぺとして主催を言い付かった合気道部の副部長がため息混じりに呟いてたが、それはオレも知りたい所だ。

幽霊や靈感や、そんな不思議なアレコレをオレは否定も肯定もしないが、彼女は自分が見た事も感じた事もないらしいのに、その辺の『良くわからないもの』が心底恐いらしい。

「幽霊より、生きとる人間の方がよっぽど恐ろしいで？」

「煩いわ。ほつとき」

本部に決められた宿舎の入り口には、武道部の連中や引率の顧問やコーチがいる。

明るくて人の多い所が今の自分の居場所だとばかりに、彼女はあっさりとオレから離れていった。

学園天国：マーガレット・クロツカス

マーガレット（恋を占う）

『好き』と『嫌い』。

二者択一なら、アタシは平次に好かれてるって言い切れる。

じゃあ、その『好き』はどんな意味？

そこで必ず躓いてしまう。

『親友』みたいな好き。

『家族』みたいな好き。

そこまでは迷わない。

だけど……。

アタシは平次に恋してる。

それは多分、錯覚でも憧れでもなく、1人の女の子として恋をしている。

それなら、平次は？

机の上のトランプから、1枚引き抜く。

白い紙の上で、ジョーカーのピエロが笑ってた。

\*\*\*\*\*

クロツカス（切望）

「和葉あ……」

「却下」

「まだ何も言うたらんぞ」

「オバチャン、松山やってな。今度は何したん？」

「オレやないわ」

改方学園の某教室に、朝っぱらからぐったりと机に突っ伏す名探偵と、そんな彼を冷ややかに見下ろす彼の幼馴染の姿があった。

「オヤジが今日から博多へ出張なんは知つとるやる？」

「うん。オバチャンも博多の友達に会いに行く言うてたのに、何で松山なん？」

「この間、どこぞの県警で出張費水増ししとったんがニュースになつてたやる？いくらオカンの分は自費や言うても、この時期にオヤジの出張にくつついて行ったら痛くもないハラ探られるだけやから、オヤジから博多行きを止められたんや」

「ああ、それで松山なんや」

クラスメイトたちには何が何だかわからないが、和葉はそれで全てを察したらしい。

納得したと言うように、ぽんと手を打った。

「……で？」

「あのオバハン、ムカついたから家事全部放棄して行きよった」  
「それで？」

「育ち盛りの一人息子がおるんに、食費も置いとらんのや」  
「だから？」

「……ハラ減った」

「パンでも買ってくれば？」

「……ハラ持ちせんわ」

「オジチャンが出張から帰って来る頃にはオバチャンも帰って来るやろし、1週間くらいならコンビニでもええやん？」

「……小遣いが持たん」

「大変やねえ……」

平次が何を言いたいのかわからない、クラスメイトにもわかる。

だが、ここには『お弁当作ってあげる』とか『晩御飯作るうか？』とか言い出す人間はいない。

いや、この状況を知ったら学内のみならず立候補する人間はいくらでもいるだろうし、クラスメイトの中にも内心では手を上げてる人間もいるかもしれないが、少なくともこの場にいるクラスメイトたちにはそれが無駄だという事がわかってる。

本人がどこまで意識しているのかはわからないが、のらりくらりとかわされながらも、平次自身が和葉以外の人間に頼もうとしていないのだから。

「……ゴハン食べさせてください」

「オバチャンからは『放っておいてや』って言われとるんやけど」

「理数系は引き受けたる」

「……時間厳守やで？」

「わかつとる」

仕方ないというように一息をついて、和葉が自分のために作ってきた弁当を差し出した。

それを満面の笑みで受け取った平次が、いそいそと包みを開ける。

いつかどこかで見た光景に、  
クラスメイトたちは揃って視線を宙に  
彷徨わせた。

## 学園天国：アネモネ・レモンバーム

アネモネ（辛抱）

オトコの部屋で暢気に寝こけるのは、どうにかしろと思う。  
それとオレのベッドを占領するのも、どうにかしろと思う。

どうにかしろと思いながらも、仕方ないと諦めてたりもするんだが。

一緒に布団で寝てたのは、多分幼稚園までだったと思う。  
証拠写真が残ってるから、おそらく間違いないだろう。

隣同士で布団をくつつけて寝てたのは、多分小学校の低学年の頃。  
これも証拠写真が残ってるから、おそらく間違いないだろう。

お互いの家は第二の自宅。  
それくらいに馴染んでいるのは認めるが、健康な高校生男子という  
ものを、もう少し理解して欲しい。

\*\*\*\*\*

レモン・バーム（同情）

和葉の携帯に電話が掛かってきて、かれこれ30分。

授業でわからない所があるから教えろとオレの部屋に押しかけてきたクセに、家庭教師を放り出したまま続いている会話は丁度佳境に差し掛かっているらしく、熱の籠ったやりとりがされている。

「うん……うん……それで？……えーっ？それってあんまりやん！」

内容は、何となく想像がつく。

恐らく東の名探偵殿がその明晰な頭脳の使い方を誤って、彼女を怒らせる事態に陥ってるんだろう。

「それって、あんまりやん！！蘭ちゃん、ちゃんと怒らなアカンよ！？そういう時には、ガツンと言ったらんと！！……そう！それくらい言うて当然や！！」

何をやらかしたのか、東の彼女は相当怒っているらしい。

これはまだまだ終わりそうにないなと昨日買ったバイク雑誌をパラパラと捲っていると、ベッドに放り出してあった携帯が着信を告げた。

メールのアイコンに開いてみれば、今まさに彼女たちの話題の中心となっている東の名探偵からの、とてもそうは見えないヘルプ要請助けを求めているクセに偉そうな文面は、いかにも彼らしい。

ここで電話をしたら、和葉はきつとオレから携帯を引ったくって、東の名探偵殿に口を挟む隙も与えずに怒涛の説教タイムに突入するだろう。

いっその事、メールに気付かなかったフリをしてスルーしてみようか。

どちらにしても何だか気の毒だし、まあ、ここで恩を売っておくの

もいだろう。

明日は我が身って可能性が捨てきれない……というか、いずれ我が身だろうしな。

『和葉が姉ちゃんと電話中』

たったこれだけのメールでも、東の名探偵にとっては問題解決への突破口になるはずだ。

次はまたメールか、それとも電話をしてくるか……。考える間もなく、即行で電話が来た。

## 学園天国：キンセンカ・スイートピー

キンセンカ（慈愛）

「コナンくん、そろそろお弁当の時間かな？」

丁度お昼を指している時計を見上げて、蘭ちゃんは優しい笑みを浮かべた。

コナンくんが蘭ちゃんの家に残けられたいきさつは、あまりよく知らない。

でも、蘭ちゃんは両親と離れて暮らすコナンくんの事を、本当の家族のように大切にしている。

「遠足だから張り切ってタコさんウィンナーとかリンゴのウサギさんとか作ってね、おにぎりにはヤイバーの型抜きがしてある海苔をまいてみたの。喜んでくれるかなあ……」

楽しみに語る蘭ちゃんに、アタシも何だか幸せな気分になる。

「コナンくんは幸せやねえ……」

両親が傍にいない事で寂しかったり辛かったりする時もあるんだろうけど、蘭ちゃんがいればきっと大丈夫なんだろうね。

「あたしたちもお昼にしようか」

「そやね、手伝うわ」

台所へと向かう蘭ちゃんの後を追って、アタシも立ち上がった。

\*\*\*\*\*

スイトピー（デリケートな喜び）

「お帰り、コナンくん」

小学校から帰った俺を出迎えたのは、蘭じゃなくて和葉ちゃんだっ  
た。

「あれ？蘭姉ちゃんは？おっちゃんや平次兄ちゃんもいないの？」

「みんな、急な用事で出かけたんよ」

彼女によると、おっちゃんに依頼が入って服部はそれにくつついて  
行った。

俺は学校だったから、蘭と和葉ちゃんは家で俺の帰りを待っていた  
んだが、そこに蘭の母親から急な呼び出しが来た。

大阪から友人も来てるし俺もまだ帰ってないからと躊躇する蘭を、  
留守番なら任せると和葉ちゃんが送り出した。

そして今に至るらしい。

「蘭ちゃんがな、台所自由に使ってええって言うてくれたから、お  
やつ作ってみたんよ？」

「わあ、うれしいなあ！」

「早う手洗うておいで。蘭ちゃんが帰って来るまで、お話してよ  
うな」

「うん！」

ひらひらとエプロンを翻しながら、楽しげに俺の世話を焼く和葉ちゃん。

蘭とは違う雰囲気と、蘭とは違う手作りの味。

俺が好きなのは蘭であって決して和葉ちゃんではないんだが、これはこれで何だかいい。

俺の正体を知ってる服部がこの状況を知ったらどう思うか、その辺は考えない事にした。

学園天国：アイスランドポピー・ラナンキュラス

アイスランドポピー（慰め）

（ああ、またや……）

部活の休憩中、日陰を求めて何の気なしに道場の裏側に向かったら、見慣れた背中を見つけた。

道場の裏側は植木と塀しかなくて滅多に人も来ないから、秘密の話をするのに丁度いい。

そう、だから『告白』なんかにうってつけの場所。

気付かれないようにそうつと表側に戻る。

（可愛い娘やったな……）

遠くて学年まではわからなかったけど、まだ制服に慣れてない感じがしたから、今年の新入生かもしれない。

（何て答えるんやろ……）

幼馴染の性格からすると、多分答えは『NO』だろう。

男でも女でも好意を持たれるのは嬉しいし、どうしても合わない人じゃなければ友達付き合いはするけど、今は『恋愛』なんて二の次三の次で、彼の興味は他に向いている。

それに、どうやら自分から追いかけるタイプらしいし。

（追いかける……ゆうのとも違うかも）

幼馴染は今でも初恋を大事に抱えてて、一度逢っただけのその女を<sup>ひと</sup>搜してる。

ずっとずっと大切にしてきたその恋が思い出にならない限り、幼馴染はきつと他の誰かに恋心を抱く事はないだろう。  
どこか頑なで、一途なところがあるから。

だから、それまではアタシの居場所はなくなるらない。  
多分。

きつと。

もしかしたら明日までの事かもしれないけれど。

\*\*\*\*\*

ラナンキュラス（移り気）

GWを利用して、工藤と姉ちゃんが大阪に来る事になった。

宿泊先はオレントコでいいとして、どこに遊びに行こうかとかゴハンはどうしようとか、和葉は連日のように姉ちゃんと電話している。  
それも、わざわざオレの家で。

和葉に言わせると『平次んトコにおれば、すぐ確認出来るやん？』  
という事らしい。

まあ、それはいいとして、今日はどうやらケーキが話題の中心で、新しく出来た店がどーのこーのと楽しそうに話している。

「タルトがどーのて言うてたのは一昨日で、その前は京和菓子。んで、今日になったらロールケーキかい」

「うるさいわ。……ああ、ちゃうんよ。平次がいらん事言うてな……」

携帯の向こう、和葉と同じ理由で姉ちゃんの傍に控えさせられていた工藤に言っただつもりだったのに、和葉の耳にはきっちり届いたらしい。

不満そうにオレを一睨みして、和葉はまた楽しそうに話を続ける。

『女ってのはそんなモンだ』

工藤が、どこか面白そうに言った。

## 眼鏡：サイネリア（前書き）

以前投稿した「眼鏡」と同一設定の小晰です。

東京の大学に進学した平次と、大阪の大学を選んだ和葉。遠恋になった2人を見守る、新一と蘭。

主に新一から見た平和小晰ですが、時間軸はバラバラです。

## 眼鏡：サイネリア

サイネリア（元気）

明日提出のレポートが仕上がってそろそろ風呂にでも入るかと思った時、まるでタイミングを見計らってたみてえに携帯が鳴った。

「和葉ちゃん？」

ディスプレイに表示された名前に、思わず声を上げた。  
友人としてメアドも番号も交換してあるが、彼女から直接俺に連絡してくるのは珍しい。

「はい、工藤です」

『あ、工藤君？遅い時間にゴメンなあ』

もしかして何かあったのかと構えた俺の耳に、いつもの明るい彼女の声が届いた。

「いや、丁度ヒマだったし、まだまだ遅いって時間じゃねえよ。それより、俺に電話なんて珍しいじゃん。何かあったのか？」

『あ、別に大した事やないんやけど……』

「服部の浮気なら心配いらねえぜ？アイツ、和葉ちゃんにぞっこんだから。それに、こっちは服部が本気になれるようなイイ女は蘭しかないねえ」

『蘭ちゃんなんて、高望みすぎやわ』

言い辛そうな様子に笑い話のように水を向けてやると、携帯の向こ

うの和葉ちゃんが可笑しそうに笑った後、どこか遠慮がちに話し出した。

『平次の浮気とかな、ホンマはちょっとだけ心配やけど、そうやなくて……』

そこで少しだけ言葉を切った和葉ちゃんが、思い切ったように話を続けた。

『平次、最近何かあったん？』

「何かって？」

『さっき電話してたんやけど、何や妙にテンション高い割に疲れとるみたいやし、せやからて落ち込んだる風でもないし……』

「ああ、ソレか」

不安そうな彼女には悪いが、思わず笑いが零れた。

声だけでわかるなんてさすが幼馴染と思うが、傍にいればわかる事でも中々会えない今は離れている分心配なんだろう。

確かに、この質問は蘭じゃなくて俺の担当だ。

「ここんトコ、事件とレポートが重なっててさ、寝不足になってるだけだよ。でも、よく気がついたな」

『伊達に幼馴染やつとらんもん。せやけど、それやったら工藤君も同じやろ？ 大変な時に電話してもうてゴメンな。あ、そうや。ゴハンは食べたん？ お風呂は？ 蘭ちゃんに心配かけたらアカンよ？ もう電話切るし、早く寝てや』

「大丈夫だよ。それよりさ……」

慌てて通話を切ろうとする彼女を、少しだけ引き止める。

「明日1限からなんだけどさ、服部が寝坊しねえようにモーニング・コールしてやってくんねえ？」

多分、服部にはこれが一番効く。  
何故なら、俺がそうだから。

「頼んだぜ？」

迷ってるらしい彼女の背中を押して、通話を切る。

彼女からのモーニング・コールは、疲れてる名探偵への俺からの差し入れだ。

有難く受け取れよ、服部。

眼鏡：薔薇・アネモネ

薔薇（私はあなたにふさわしい）

「私の何が不満なの！？」

ヒステリックに喚く女を無視して、服部が少し先で待っていた俺に追いついてきた。

「相変わらずだな」

「鬱陶しいわ」

不機嫌そうに言い捨てる服部に苦笑を返して、追い掛けてこようとする勘違い女を眺めてみる。

世間では美人と言われているだろう容姿と東都大に入れる程度の頭が自慢の、底の浅い馬鹿な女。

自分が望む事は叶えられて当然で、自分に相応しいからと選ばれた男は皆感激して傳くし振られる事などありえないと思っている、高慢な女。

あまりの愚かさ、思わず嘲笑が零れた。

「頭の弱え馬鹿な男たち集めて女王様やってりやいいのに、何でアレ系の女ってオメーみてえなヤツに目えつけるかねえ」  
「知らんわ」

服部の機嫌は最低だ。

まあ、それも仕方ねえか。

何だかんだで、この2ヶ月くらい和葉ちゃんに会えてねえしな。  
あの女も、服部の機嫌のいい時狙って迫ればもう少し優しく振って  
もらえただろうに、その辺の空気が読めないあたりも賢くない証明  
だ。

「それ、効力が切れてきてんじゃねえか？」

女に見せ付けるように服部の右手の薬指に納まってる指輪を指差す  
と、追い掛けてこようとしていた足が止まった。

噂好きの女たちから、服部の指輪の事は聞いてるはずだ。

そんな物は自分がちよつと気のあるフリをするだけで捨てさせられ  
ると思っていたらしい女は、傍にいるわけでもないこんな小さな指  
輪でしか存在を示せない『恋人』に完敗させられた事に、ようやく  
気が付いたらしい。

「いつそのこと、左手用キメちまえば？」

「……まだ死にたないで？」

一瞬、本気で考えたんだろう。

からかうような俺のセリフに、服部からの返しはワンテンポ遅れた。

\*\*\*\*\*

アネモネ（はかない恋）

友人達と遊びに来た筈のゲレンデで、友人の1人が犯した殺人。殺された友人と喧嘩したばかりだったためか、私は危うく犯人にされかけた。

その私の疑いをさらりと晴らしてくれた、彼。

躓いた私を支えてくれた力強い腕。

私を気遣う言葉をかけてくれた耳に優しく響くバリトン。

私に向けられた笑顔。

恋をするのは本当に簡単。

きっかけなんて、いくらでもある。

殺人事件に巻き込まれるなんていう非日常的な事なんてなくても、私はきつと彼に恋をしたと思う。

「あの……」

連行されていく友人の後姿を見送りながら、何とか彼の気を引こうと声をかけた。

警察の人との会話を聞いていたから彼の苗字が『服部』だというのはわかってるけど、それだけじゃダメ。

少しでも多く彼の事を知りたいし、少しでも多く私の事を彼に知ってもらわなければ、また会う事も出来ないから。

だけど、彼は私の声にも気付かずホテルへと戻って行く。

追いかけてようとして、思わず足が止まった。

ホテルのロビーから飛び出すようにして駆け寄ってくる女の子。

横顔しか見えないけど、私の時とは全然違う嬉しそうな笑顔を向ける彼。

ああ、そうか。  
そうだね。

始まる前に終わった恋。  
胸に走った痛みは本物だった。

## 眼鏡：オオニソガラム

オオニソガラム（潔白）

「ちょっと待つて、和葉ちゃん！落ち着いて！！」

新聞を取りに外に出て、居間に戻ってみたら蘭が血相を変えて携帯を握り締めていた。

「どうしたんだ？」

「新……」

心底困ったという顔で俺を見上げた蘭は、また慌てて携帯を握りなおした。

「殺人は割に合わないよ！ね、ちょっと考えよう？」

殺人とは穏やかじゃねえ。

「ね、あたしも協力するし、まずは白状させなきゃ！殺しちゃうのは最終手段でしょ？だから、ちょっと待つて！すぐそっちに行くから！早まっちゃダメよ！？」

何とか相手を納得させたのか、蘭は通話を切ると疲れたように大きなため息をついた。

「何があつたんだ？」

「和葉ちゃんからだっただけどね」

「彼女、来てるんだ」

「うん。服部君は依頼だとかで出かけちゃったらしいけど」

「それで？」

「仕方ないから、洗濯とか掃除とかしようと思ったら、ピアス見つけちゃったんだって。それもベッドの下から。勿論、和葉ちゃんのじゃないわよ？」

「……で、殺人やら何やらの話になったと」

「うん」

「アイツが浮気してると思うか？」

「そうは思わないけど、ピアスがあっただよ？女の子、部屋に入れたのは確かだよな？」

「俺が知ってる限りじゃ、アイツの部屋に入った事あるのは俺くらいだぜ？」

「じゃあ、何でベッドの下にピアスがあるのよ！？あたしも言っておきたい事があるし、ちょっと和葉ちゃんの所に行って来るね！」

「俺も行くよ」

段々とエスカレーターしてきた蘭の様子に、たまにはヤツの援護でもしてやるかと腰を上げた。

どうせ、何処かの女がわざと自分のピアスを服部の上着か荷物にでも紛れ込ませてて、アイツが知らないうちに部屋ん中に転がったんだろう。

だが、怒った彼女たちにアイツからそんな説明した所で、ただの言い逃れだと思われて火に油だ。

何しろ、証拠もないからな。

状況証拠と証言で身の潔白を証明するには、俺が必要だ。

「1つ貸しだぜ？」

何も知らない服部にメールで一報を入れながら、こっそりと呟いた。

## 眼鏡：ヒアシンス・ハハコグサ

ヒアシンス（心静かな愛）

『幼馴染との恋なんて、お手軽すぎてつまなくねえか？』

東都大に進学して東京で暮らすようになって、新しく出来た知り合いから言われた一言。

心底むかついて、そいつの存在を無言で切り捨てた。

大阪にいた頃は世界はまだそう広くはなかったし、いつでも2人一緒にいたから、その中にいる人たちはオレたちの事をわかっていた。だから、そんな質問をしてくるヤツはいなかった。

けれど、東京ではオレたちの関係を本当に知っているのは、工藤たちくらいしかない。

だから、こんな下らない質問をしてくるヤツが出る。

派手な恋も、駆け引きや手管も、そんなものはいらない。

今、この手にあるものが、オレが必要とする全てだ。

知らないんだから、仕方がない。

掌で包み込むようにしてゆっくりと温めた恋を知らないんだから、仕方がない。

そう流せるようになるには少し時間が必要だったが、その頃にはそんな質問は消えていた。

\*\*\*\*\*

ハハコグサ（いつも思う）

どんな難事件でも鮮やかに解決すると評判の、只今東に揃っている  
大学生名探偵たち。

事件が彼らを呼ぶのか、それとも彼らが事件を嗅ぎ付けるのか、今日も今日とて名探偵たちは現場へと飛び出して行った。

——その場に彼女たちを残して。

「なあ、蘭ちゃん」

「なに？」

「アタシ、ずっと思ってたんやけど……」

「なにを？」

「……平次がこっちに来てから、事件遭遇率がってへん？」

「それは……」

考えるように視線を宙に彷徨わせた蘭は、ふっと息をついてどこか達観したような笑みを浮かべた。

「2人とも事件体質だもんねえ」

「これも相乗効果ってヤツなんかな？」

和葉もまた、何か悟ったような笑みを浮かべた。

## 眼鏡：ユキノシタ

ユキノシタ（愛情）

『服部君、元気にしてる？』

『服部君、ちゃんとレポート出してる？』

『服部君、お昼は何食べたの？』

『服部君、今日は道場に行ったの？』

『服部君、最近依頼受けてるの？』

『服部君、女の子に言い寄られてない？』

服部が東京の大学に進学してからというもの、メールは勿論、電話の時も俺と会ってる時にも、必ずといっていいほど蘭から『服部君』という言葉が出る。

面白くない。

とにかく面白くない。

たとえその理由がわかっていたとしても。

「ねえ、新一。服部君……」

「元気だ。メシも喰ってるし、レポートも遅らせた事はねえ。心配いらねえ」

「もう、何なのよ」

「……いや、別に」

ただの嫉妬だ。

それも相当くだらない意味での。

確かに、蘭はある意味で服部に愛情を持つてる。

だけど、それは異性に対するものじゃない。

……と言つか、どちらかといえば和葉ちゃんに対する愛情のような気がする。

当然ながら、親友としての愛情だが。

それでも、蘭の口から他の男の話題が出るのは気に入らない。

「ねえ、新一。もし新一が大阪の大学に進学して、あたしが東京の大学だったら、どうだったと思う？」

この仮定は少しばかり無理があるが、もし俺が大阪に進学して蘭とは遠恋になったとしたら……。

「和葉ちゃんたちだったら、もつと頻繁に新一の事をあたしに連絡してくれると思うよ。ううん、もしかしたら2人がかりで新一を東京まで連れてくるかも。それも、毎週」

楽しげな蘭のセリフに、思わず頷く。

大阪の少しばかりお節介な友人たちなら、まず間違いなくやるだろう。

からかいという名の建前に隠された心配から、それこそ自分たちのデートを後回しにしても。

「それに比べれば、あたしたちのやってる事なんて、本当に些細な事だと思ふな。新一は、そう思わない？」

遠恋になった服部と和葉ちゃんのための、少しばかりの情報交換。嫉妬や独占欲なんて感情が入り込むようなモンじゃない。

わかっていながら、やっぱり拗ねてしまう自分に苦笑して、俺は完敗を示すように両手を軽く上げた。

## 眼鏡：タネツケバナ

タネツケバナ（勝利）

お喋りに夢中になってる蘭と和葉ちゃんに居間を明け渡して、俺はコーヒーカップ片手に服部を書斎に引きずり込んだ。  
勿論、服部には自分の分のカップを持たせてある。

「そこに座れ」

書斎の小さなソファセットを指差して服部を座らせると、ガラステーブルにカップを置いて俺もヤツの正面に腰を落ち着けた。

「吐いてもらおうか」

「何の事や？」

「居間で蘭が和葉ちゃんと盛り上がってる話題についてだ」

「オナナ同士の話に首突っ込むモンやないで？」

「……どんな手を使ったんだ？」

「せやから、何がや？」

「どんな策略を巡らした？」

「何の話や？」

「あの親父さん相手に正面突破は難しいだろ？どうやって攻略したんだ？外堀から埋めたのか？それとも『既成事実』ってヤツか？昔なら、手えつけた段階で既成事実成立って事でいけたらしいけどよ、今の時代ならデキたってあたりか？そうになったら、さすがの親父さんも折れねえワケにやいかねえもんな」

「……正面突破や」

「ふうん？」

「学生で脛齧りの分際であの親父さん相手に搦め手でいくほど、オレも命知らずやないで？堂々と正面から特攻かまして、何とかあそこまでは妥協してもらったんや」

「ま、戦果としては上々じゃね？祝ってやるからさ、次の戦に備えて英気を養っておけよ」

「……おおきに」

久しぶりに東京に遊びに来た和葉ちゃん。

その左手の薬指で光る、服部の勝利の証。

今頃、居間では蘭が和葉ちゃんを問い詰めて、色々聞き出しているだろう。

あとでゆっくりと聞きながら、からかうネタを仕入れるのもいい。

取り敢えずは祝ってやろうと、俺はコーヒークップを掲げて見せた。

## リトル・プリンセス：ユズリハ（前書き）

「眼鏡」と同じ設定で、コメディです。

夏休みに入って東京の平次の元に遊びに来た和葉だが、朝目が覚めたら何故か身体が縮んでた！？

小さくなった和葉と何かのスイッチが入ってしまったらしい平次、あまり動じていない蘭と面白そうに見守る新一。

このシリーズだけ何となく連載風に、和葉のお子様生活開始までの話です。

## リトル・プリンセス：ユズリハ

ユズリハ（若返り）

目が覚めたら、世界は巨大化していた。

いや、それは冗談にしても、そう言いたくなるような光景が和葉の前に広がっていた。

「何なん、コレ!？」

爽やかな朝には不似合いな頓狂な叫び声が、さほど広くはないワンルームの部屋に響いた。

「……で、何でそうなったんや？」

「そんなん、アタシが訊きたいわっ!！」

ベッドの上、だぶだぶのシャツの袖を持て余しながら、和葉がぼふんと枕を叩いた。

昨夜、寝るまでは変わりはないかった。

東京駅で待ち合わせて、少し遊んで夕食をとってから平次の部屋に来た。

それなりのコトがあつて、いつものように平次のシャツをパジャマ代わりにして眠った。

何も変わった事はなかったはずなのに、目が覚めたらそれでも大きな平次のシャツは、襟元から和葉の肩が抜け出しそうな程に大きくなっていた。

——正確に言うならば、肩が抜け出しそうな程に和葉が縮んでいたのだ。

「何なんよ、もう……」

気丈に振舞ってはいるものの、和葉は今にも泣き出しそうに眉を寄せている。

「アテはあるんやから、そう落ち込むなや」

宥めるように和葉の髪を撫でながら、平次は転がしてあった携帯を拾い上げて新一を呼び出した。

コナンが新一だった事やあの奇妙な薬の事は、蘭と和葉には話してある。

だからこそ、和葉も酷いパニックを起こさないで済んでいるのだ。あのマッドサイエンティストに連絡さえつけば、問題は解決する。

「は？バカンスやと？1ヶ月は帰って来ない？」

工藤邸の隣の怪しい科学者宅に居候しているマッドサイエンティストは、東京の夏の暑さを嫌って北欧方面に長期滞在中で、あと1ヶ月は帰って来る気はないらしい。

とにかく、連絡だけでもしてみてくれと頼んで通話を切ると、平次は大きくため息をついて携帯を枕の上に放り投げた。

今は大学も夏休み中だし、和葉は幸いバイトも入れていないし、大阪の親たちは連絡さえ入れておけば不審がりはいないだろう。

その辺の心配はないが、長ければ1ヶ月間、このお子様和葉のまま。

「……しゃあないな、従兄妹って事にしとくか」

「あんまりやあ……」

20歳の大学生と、見た目小学生の同い年の彼女。

夏の陽射しも予想できなかっただろう奇妙な同居生活の、これが始まりだった。

## リトル・プリンセス：チューリップ

チューリップ（長く待ちました）

「まずは、何か喰うて落ち着こうや……言っても、ロクなモンないけどな」

男の一人暮らしの部屋にはあまり似合わない小型の冷凍庫を覗き込んでいた平次が、今度は冷蔵庫を開けた。  
前回和葉が作って冷凍しておいた惣菜類はあらかた平次の胃の中に収まっていて、ほぼ空に近い。

冷蔵庫の中も同じような状態だが、それでも取りあえず軽い朝食くらいにはなりそうなものは見つかった。

「あんな……」

「何や？……あ、小袋のココアがあるわ。牛乳あるし、お子様の朝はココアやんな」

「えっと……」

「昨日の残りモンやけどクロワッサンあるし、冷凍庫に野菜スープも残ったからコレあっためて。卵もあるけど、コレは目玉焼きでええやんな？」

「せやから……」

「ゆで卵の方がええか？それ以外をオレに求めんなや？チャレンジしたつてもええけど、後悔しても知らんで？」

「……目玉焼きで充分やよ」

「せやったら、決定やな。目玉焼き言うくらいやから卵は2つが基本やと思うんやけど、お子様には多いか？」

「……1つにして」

「1つやな。すぐに焼けるし、さつさと顔洗って来いや」  
「……うん」

元々結構面倒見のいい平次だが、お子様和葉の姿に何かのスイッチが入ったのか、それともプチパニックを起こした思考回路を何とか日常に戻そうとしているのか、あれこれと世話を焼き始める。

何か言いたげな和葉だったが、今は何を言っても平次の耳には届かない事を悟って、言われるままに大きなシャツを引き摺るようにして洗面所に向かった。

「へいじ〜!」

「何や?」

「届かへん……」

フライパンに蓋をした所で呼ばれた平次が見たものは、洗面台の縁に手を掛けて爪先立ちしているお子様和葉の後姿。

小さな洗面台はそう高い位置にあるわけではないが、平次のシャツを引き摺る程に縮んでしまった和葉には、懸命に背伸びをしても蛇口は少しばかり遠かった。

「しゃあないな。ホレ」

「きゃあっ!」

「さつさとせえ。目玉焼きが焦げるで?」

腰を支えるようにして抱き上げられたのはいいが、回された腕が微妙な位置に来て和葉が慌てる。

それに気付かないのか、平次がせっついた。

仕方がないとばかりに手早く顔を洗って、食卓代わりにもしているガラスのローテーブルの前に座った時には、和葉は既に半日分くらいの力を使い果たしたかのようにぐったりとしていた。

だが、とにかくまず言わなければいけない事があるからと、和葉は目玉焼きを前に残った気力をかき集めた。

「あんな……」

「ソレ喰つたら、まずは買い物やな。昨日着てたキャミやつたつけ？アレ、襟元とかフリフリ付いとるし、ワンピースみたいに見えるんやないか？さすがにその格好のままやつたらオレがアブない趣味の誘拐犯に見られそうやし、何でもええから取りあえず服を買わんとな」

「せやから……」

「ああ、靴もやな。ミュールやつたか？サンダルみたいなん、置いてあつたやんな？近所ちよお歩くくらいなら、それでもOKやろ」

「せやけど……」

「2件先に小さい古着屋があつてな、子供のモンもいくらか置いてるから、そこで間に合わせてから色々揃えようや」

「その前にな……」

「コツチやつたら大阪ほど知り合いにも会わんけど、流石に従兄妹は無理があるか？コナンみたいにオレのオカンの遠縁の子おやてしところか。それやつたら、同じ名前で呼んだかて、偶然やとか親戚から貰たとか誤魔化し効くやろ」

「平次！」

どんどんと進められていく話を遮るように、和葉がフォークを握り締めた小さな拳を振り上げた。

「目玉焼き、固焼きやなくて半熟の方が良かったんか？」

「そうやなくて！」

フォークを叩き付けたい衝動を何とか収めた和葉が、がっくりと肩を落とした。

それでも、朝起きてから今まで続いた平次の話を漸く遮れたのだからと、和葉はどうしても言いたかった事を口にした。

「服とか靴とか従兄妹とかの前にな、大事な事があんなん」

「何や？」

「……下着」

「下着？オマエ、今はぺったんこなんやし、ブラはいらんやろ？」

「ぺったんこって何やムカツクけど、ブラはええねん。そうやなくて……」

頬を赤く染めて俯いた和葉に、平次は漸く彼女が言いたかった事に気が付いた。

「パンツか？」

いくら和葉が細いとはいえ、綺麗な曲線を持つ成熟間近の女性の下着は小さな頃から細かった彼女には大きくて、押えていないと落ちてしまいそうになる。

ますます赤くなる和葉に、ふと平次の悪戯心が疼いた。

「もしかして、オマエ、今ノーパンか？そら、外には出られんなあ」

にやりと笑ってテーブルを回り込んでシャツを捲り上げようとした平次に、和葉は赤い顔のまま無言で渾身の蹴りを入れた。

## リトル・プリンセス：シザンサス

シザンサス（よきパートナー）

「前から思ってたんだけど、服部君って結構面倒見が良くて子供好きだよ」

太陽がじりじりとアスファルトを焼いている真夏の昼下がり、適度にクーラーをかけた快適な工藤邸のリビングで寛いでいる蘭の何気ない一言に、新一は思わず飲んでいたアイスコーヒーを吹き出しそうになった。

「いきなり何だよ」

「だって、ほら……」

蘭が指差したのは、ジュースだのスナックだのアイスだのが所狭しと並べられているローテーブル。

持ち込んだのは、小さな和葉を連れて現れた平次だ。

「今だって、手を洗うのに洗面台が高くて届かないといけないからって、和葉ちゃんについていってあげてるでしょ？最初話を聞いた時にはね、和葉ちゃんがあんな事になっちゃったから責任感でやってるのかなって思ったんだけど、そんな感じないじゃない？」

「……まあな」

『アレはどう見ても責任感じゃなくて楽しんでるだろ』というセリフを、新一はアイスコーヒーと一緒に飲み込んだ。

男なら一度は考えるだろう『光源氏計画！紫の上育成大作戦！』は、

見果てぬロマンの1つだ。

今回の件では生憎と見た目はどうあれ中身は大人なので自分好みの女に育て上げるといえるのは無理だが、そんな気分は味わえる。

いや、そもそも好みの女が見ただけ小さくなったというのは、かえって好都合かもしれない。

自分は決して幼女趣味ではないが、そんな背徳的な気分まで味わえるのだから。

……確実に法に触れてしまうだろうヨコシマな欲望を抑えるのは大変そうだが。

「……ちよつと羨ましいかもしんねえ」

「え？」

「いや、何でもねえ」

思わず零れた呟きを適当に誤魔化して、新一は残ったアイスコーヒ―を飲み干した。

彼女が幼かった頃は自分もやつぱり幼くて、それはそれで楽しかったとしても大切な思い出だけれど、あの頃の彼女に会ってみたいとも思う。

「おやつ食べて一休みしたら、お買い物行かなきゃね。和葉ちゃんのもの、色々揃えなくちゃ。何だか、年の離れた妹か娘でも出来たみたい」

『娘』という単語に、新一の中でほのぼのホームドラマが開幕した。

可愛い娘を挟んで手を繋いで歩く若い夫婦。

楽しげに笑いながら愛娘の服を選び、途中でソフトクリームなんか食べてみたりして、愛娘の口元を拭いてやっていた妻がついでのよ

うに夫の唇に残ったクリームも拭いてみたり。  
折角だからキミの服も買おうか、あらあたしよりアナタのシャツを  
買いましょうよとか何とか。

新一の脳裏で繰り返られるのは、ホームドラマの登場人物たちが、くるつと振り返る。

小さな和葉が手を繋いでいるのは、蘭と平次。

「ちょっと待て！」

女の子の物を選ぶなら蘭は絶対に外せない。

子供が和葉なら相手は間違いなく平次だ。

この場合、組み合わせは決して間違っていない。

「ぜってー認めねえ！」

「何が？」

突然立ち上がって叫ぶ新一に、暑いもんねえクーラーの設定温度下げた方がいいかしらと思いつつ蘭が問い掛ける。

恋人の突然の行動にもあまり動揺していないあたりは、さすが幼馴染と言わべきか。

「俺も行くぞ！」

「お買い物？」

「おう！娘の服選ぶのは俺の役目だ！」

「あ、和葉ちゃん、アイスどれがいい？」

何だか不思議なトリップをしてしまったらしい新一は放って置く事にしたのか、蘭は満面の笑みで小さな和葉を手招いた。



## リトル・プリンセス：サフラン

サフラン（喜び）

小さな和葉ちゃんの手を引いてふわふわピンクで溢れた子供服のシヨップに入っていく服部に、俺は盛大なため息を落とした。  
どう考えても、おかしい。

ヤツなら、もつと適当にＴシャツやＧパンを選びそうなモンなのに、買い物を始めてからというものの、蘭のアドバイスも和葉ちゃんの希望もあっさり無視してヒラヒラでフリフリでキラキラなものに拘ってる。

今までにも何度か、服部が選んでくれたと嬉しそうにしている和葉ちゃんの服を見た事があるけど、特にヒラヒラもフリフリもキラキラもしてなかったと思うんだが。

小さくなった和葉ちゃんを見て、何かのスイッチが入っちゃったのか？

それとも、実はそういう趣味だったのか？

蘭が和葉ちゃんと一緒に会計に行ったのを確認して、俺は服部を店の隅に引っ張った。

「何や？」

「オメー、あのセレクトってどうなんだよ？」

「可愛えやろ？」

「確かに、可愛いのは認めるけどよ、アレはやりすぎじゃね？」

眉を顰める俺に、服部は意味深な笑みを浮かべた。

「なあ、工藤。姉ちゃんがあのサイズやったら、どう思う?」

服部の問いに、俺は奥にいる蘭に視線を移した。

アホトキ……もとい、アポトキシンの特徴なのか、見た目は小学生だけれど、何故か一様に背の順で並んだらダントツで一番前にくるサイズになる。

そのサイズの蘭が目の前に広がるキラキラとしたフリフリヒラヒラの世界にいる姿を想像して、俺はいきなり『萌』とか『ロリータ趣味』とかいうものを理解したような気がした。

「どうや?このチャンス、生かそうと思わんか?」

にやりと笑う服部に、俺も同じような笑みを返す。

俺も服部も、別に幼女趣味はない。

だが、こんなチャンスが巡ってきたなら、色々遊んでみたい。小さな彼女を飾り立てて、存分に甘やかしてみたい。

『妹』ではなく『娘』でもなく、ましてや『本物の少女』でもなく、見た目はどうあれ『彼女』なのだから、連れ歩いたところで外見以外は何も問題はないんだし。

「同士!!」

ほんと服部の肩を叩き、俺はヤツと固い握手を交わした。

リトル・プリンセス・山査子・アイスランドポピー

山査子（希望）

「蘭ちゃんという！」

「アカン」

「あら、あたしは構わないわよ？」

「いや、俺は構う」

「オンナはオンナ同士やん！」

「他人様に迷惑かけんなや」

「別に、迷惑なんてないわよ？」

「いや、迷惑ってーかその……」

「後は椅子やな。届かんのは洗面所と台所くらいやし、低い折り畳みでええやろ」

「それなら家にあるわよ。暫くの間だけだし、和葉ちゃんさえ良ければ使って？」

「ああ、あれなら作りもしっかりしてるしいいかもな」

「うん、ありがと……」

「これで大体OKか？」

「ちよつと散財しちゃったね」

「いや、ホンマ助かったわ」

「ありがと……」

「じゃあ、何かあったらまた電話してね。和葉ちゃん、お腹冷やしちやダメよ？」

「……うん」

「この夏の計画、少し修正がいりそうだな」

「今夜にでも電話するわ」

ボタン、と車のドアが閉められた。

そこはかとなく感じる不安から蘭と一緒に暮らしたいという和葉の希望は、特に相談したワケでもないだろうに何故か同調している平次と新一によってことごとく流され、蘭の協力を仰いで揃えられた小さな和葉のためのアレコレは、既に平次の部屋に運び込まれている。

これ以上何を言っても無駄だと悟ったのか、助手席から手を振る蘭に疲れた笑顔で手を振り返しながら、和葉は大きなため息をついた。

\*\*\*\*\*

アイスランドポピー（慰め）

フリフリのレースの飾りのついた白いソックスが1足と、シンプルな柄のソックスが何足か。

イチゴ柄のパンツが1枚と、パステル調のシンプルなパンツが何枚か。

バルーン袖とひらひらしたギャザーのミニスカートと後ろで結ぶリボンが特徴的なレースで埋もれそうなワンピースが1着と、肌触りのいいTシャツやデニムのスカートが何枚か。

胸元や裾にリボンとフリルがついたファンシーなパジャマが1枚と、

さっぱりしたギンガムチェックのパジャマが1枚。  
ストラップに花があしらわれた白いサンダルが1足と、動きやすそうなピンクのスニーカーが1足。

買ってもらったものを片付けながら、和葉は思わず大きなため息をついた。

別に揃えられたものに不足があるわけではないし、不満があるわけでもないし、買い物も順調に終わった。

ただ、知ってはいけないものを知ってしまったような、見てはいけないものを見てしまったような、そんな戸惑いがあるのだ。

（平次って、もしかしてロリコンの少女趣味？）

ヒラヒラフリフリを主張して譲らなかったのは、平次。

女の子らしい可愛いデザインだけれどシンプルなものを選んでくれたのは、蘭。

（蘭ちゃんがいてくれて、ホンマよかったわ……）

もし蘭がいてくれなかったら、今頃ここは子供用通販雑誌に載っているお姫様仕様の部屋のようヒラヒラでフリフリでキラキラなあれこれで埋もれていただろう。

和葉にしても決してそれらが嫌いなわけではないが、そればかりで埋め尽くされてしまうのは正直キツイ。

蘭にこんな姿を見られたくはなかったけれど、彼女がいてくれた事が今の和葉にはとてもありがたかった。

リトル・プリンセス・山査子・アイスランドポピー（後書き）

「花便り」終了です。

お付き合いありがとうございました。

次回もまた過去作からになると思いますが、ここに出せるものが見  
つかったら投稿させて頂こうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5355f/>

---

花便り

2010年10月12日03時21分発行